

新しい地方経済・生活環境創生交付金事業評価シート

		担当課名	企画政策課	事業No.	1
事業名		(仮称) 藍住町世代間交流施設を中核とした持続可能なまちづくり推進事業【第2世代交付金】			
目的		(仮称) 藍住町世代間交流施設を整備することで、住民同士のつながりを形成し、それを維持する仕組みづくり・仕掛けづくりを行い、「ひと」づくりを実現する。更には新たな地域コミュニティの活動の場となり、地域コミュニティ活動の維持・活性化に繋げ、町や地域に関わる住民が主体的に参画する「まち」づくりに進展させる。これにより「誰もが生涯にわたって安心して暮らすことができる」、「全世代が活躍できる」魅力的なまちづくりを実現する。			
実施内容		既存施設である老人福祉センター「藍翠苑」及び勤労女性センターを複合化するとともに、新たな施設機能を付加した(仮称) 藍住町世代間交流施設を整備する。新施設では、町民や来館者が自由に集える空間を中心に据え、世代や属性を超えた交流を促進する仕掛けを柔軟に展開する。			
重要業績評価指標(KPI)	指 標	目 標		実績	
	人口の増減数	-577人(2028-2032) → -288人(2028-2032)		—	
	年間来館者数	0人(2019) → 42,000人(2032)		—	
	新施設で定期的に活動する地域コミュニティの数	38団体(2024) → 58団体(2032)		—	
達成度		A 達成 B：概ね達成 C：未達成			

【事業費と財源内訳】

(単位：円)

2025年度	計画額	実績額	交付金充当額	備 考
事業費	80,000,000	52,800,000	26,400,000	事業費の1/2

【2025年度の取組と課題】

2025年3月に「(仮称) 藍住町世代間交流施設整備基本計画」を策定し、これに基づき施設整備に係る事業者を公募型プロポーザル方式により募集した。事業者選定では、一級建築士、大学准教授、町関係者2名で構成する「(仮称) 藍住町世代間交流施設整備事業設計・施工者選定委員会」において応募があった3グループからの事業提案書の審議がされ、最優秀提案者が決定された。町では、選定委員会からの報告に基づき、同事業者を優先交渉権者として選定し、9月に町議会の議決を経て契約を締結した。

10月から設計業務に着手し、関係者、関係機関等と協議・調整を進めながら事業を進めているものの、受注者の提案に基づく詳細な実施工程の精査及び各種要望等を踏まえた事業計画の再編の結果、当初は年度末で基本設計の完了を見込んでいたが、3か月遅延することとなった。そのため、事業費の一部を2026年度に繰り越す必要が生じた。

【今後の取組】

基本設計は3か月遅延することとなったものの、詳細設計は当初計画どおり2026年9月に完了する予定であり、11月から施設の建築工事に着工する見込みである。

資材価格の高騰や人件費の上昇が続くなか、中東情勢の影響による石油由来の製品の納期遅延、出荷調整等が報道されている。現時点では設計業務段階のため、具体的な事業への影響を見通すことは困難だが、今後も中東情勢の影響が長期化・深刻化すれば、工事価格の上昇や工期の見直し等、事業遂行に影響を及ぼす可能性が十分に考えられる。

引き続き請負事業者と緊密に連携し、建設市場の最新情報を注視するとともに、資材の早期確保や工程管理の最適化に努めていくとともに、万が一影響が生じる場合についても、事業への支障が最小限となるよう、速やかな対応と適切な調整を図っていく。

また、当初事業提案書において、請負事業者は町が提供した地盤資料を参考に杭の仕様を想定していたが、事業請負契約後に地盤調査を実施した結果及び選定委員会、関係団体、議会等からの各種要望等を踏まえた平面計画等の決定に伴う詳細な構造や仕様の検討を進めた結果、当初想定 of 杭仕様では建築基準法上の構造耐力基準を満たさないことが判明したため、杭長・杭径・杭本数の仕様を見直す必要が生じた。この適法化のための仕様変更により、当初見込んでいた杭の製作期間が2か月から3.5か月へと延伸することとなった。

当初計画では2026年度が758,000千円分、2027年度が1,031,000千円分の事業進捗を見込んでいたところ、上述の「外部有識者及び地元からの要望への対応」「適法化への対応」といった外的要因により出来高事業費に約2か月分の遅れが生じることとなった。これを改めて実施工程を精査した結果、2026年度が323,100千円、2027年度が1,465,900千円となる見通しである。

なお、2026年度に遅れは生じているものの、工程の調整により2027年度末までには遅れを取り戻せる見込みである。

※藍住町総合計画・総合戦略推進委員会の意見

・主観ではあるが、藍住町は近隣の北島町と比較して「地域コミュニティが非常に希薄化している」と感じている。今後、徳島県の高中学区制の変更（普通科の全県下通学化）などにより、周辺自治体との住環境の差が小さくなることが予想される。その中で藍住町が選ばれるための重要な要素の一つとして、「地域のコミュニティの温かさ」が挙げられる。住民が力を合わせていけるよう、さまざまな機会を持って地域住民が協力し合える場・機会の創出が大切である。

・これからのキーワードは「行政と住民が協働し合う町」である。藍住町は四国内の町村で数少ない人口規模を持ち、住み心地ランキングでも四国内で上位に位置する住みよい街である。世代間交流施設の完成も踏まえ、人口が緩やかに減る大変な状況の中でも夢が膨らむ町であり、今後は行政から住民へコミュニティづくりができる働きかけを行い、住民と協働したまちづくりを目指すタイミングが来ている。